

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02034

研究課題名(和文) 陽明学の伝播と書院祠廟祭祀 嘉靖年間を中心とする考察

研究課題名(英文) Spread of Yangming school and the role of Shuyuan Temples of it - a research around the Jiajing period

研究代表者

鶴成 久章 (TSURUNARI, HISAAKI)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20294845

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：明の嘉靖九年に王守仁の祭祀の中心となる施設として天真精舎が浙江省杭州に建立されて以降、王守仁を祭る祠廟が各地に広がっていった状況を、関連する文献資料の分析を通して考察した。そして、王守仁の逝去後に各地に設立された祠廟のうち、嘉靖年間に、王守仁の直弟子が建立したものに関して、名称、所在地、設立に関与した門人の一覧、及び残存する記録資料について整理した。また、浙江省、安徽省、福建省において、王守仁の祭祀に関連する史跡の現地調査を行った。これらの調査を通して、現地に残存する石刻の写真データほか種々の関連資料と様々な有意義な知見が得られた。

研究成果の概要(英文)：In 9th year of Jiajing (1530), Tianzhen Jingshe, a temple, was founded in Hangzhou, Zhejiang Province as the center of Wang Shouren's ritual. Since then, there was movement to found the temples in various places. I analyzed through various texts about the temples founded in various places by direct disciples of Wang Shouren after his death during Jingling period. I organized and classified names of the temples, their locations and the list of the disciples involved in establishing them and the remaining record materials. Meanwhile, I did field surveys of historical sites related to Wang Shouren's ritual, in Zhejiang Province, Anhui Province, and Fujian Province. Through these investigations, I took photographs of the remaining stone monuments and found various related materials in those sites and gained meaningful information.

研究分野：中国哲学

キーワード：書院 精舎 王守仁 陽明学 祭祀

1. 研究開始当初の背景

中国独自の教学施設として発達した書院（精舎）についての研究は、中国国内において一大分野を形成しており、非常に多くの研究書や資料集等が出版されている。ところが、日本においては、書院の研究は決して盛んとは言えず、専著はこれまで2冊（大久保英子『明清時代書院の研究』国書刊行会 1976、林友春『書院教育史』学芸図書 1989）のみで、専門の論文も少ない。また、日本における中国書院の研究は、朱熹と「白鹿洞書院揭示」に関するものに偏しており、書院の主要な機能・役割とみなされている「蔵書」「祭祀」「講学」の諸活動のうち、「祭祀」に関わる方面の研究は極めて低調であった。

いわゆる陽明学の創始者であり、明代思想史を代表する人物である王守仁（陽明）の「年譜附録」（『王文成公全書』所収）には、彼が逝去した後に、門弟達が各地に師の祭祀を行うための書院・祠廟を建立し、師説の継承と伝播・拡散のための拠点として整備していった記録が多く残されている。しかしながら、従来の研究では、陽明学が信奉者を獲得していく過程で、書院・祠廟における王守仁の祭祀が具体的にどのような影響を与えたのかという問題についてはほとんど解明がなされていない。

上記のような背景のもと、本研究は、書院・祠廟祭祀という新たな観点から陽明学の発展過程について考察を行うことを目指したものである。

2. 研究の目的

本研究は、王守仁の逝去後に、門弟達が各地に師を祀る書院・祠廟を建立し、師説を継承し広めるための活動拠点とした状況を、文献記録の精読と現地調査とによって考察し、陽明学が明末の思想界で強い影響力を獲得していく上で書院・祠廟の祭祀が果たした役割を明らかにすることを目的とするものであった。また、この研究を通じて、嘉靖年間から万暦年間に、陽明学が信奉者を拡大して、万暦十二年（1584）に王守仁が孔子廟に従祠されるに至った思想史的な文脈を、祭祀の言説の分析を通じて明らかにし、さらに、伝世文献から書院や祠廟に関わる記録を博捜するのみではなく、現地の遺址に残存する文物を調査することで、新たな研究資料の発掘と資料保存の方面でも成果をあげることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、王守仁を祀った書院と祠廟に関する文献研究と現地調査とによって、新たな資料の発掘を行い、その上で、それらを分析して、陽明学が伝播・流行していった具体的な状況を祭祀の実態とそれに関わる思想的言説から明らかにしようとした。具体的には、王守仁の逝去後に各地に建立されたとされる約75の書院と約420の祠廟（毛奇齡『王

文成伝本』の記録に拠る）のうち、嘉靖年間（1522～66）に王守仁の直弟子達が建立したものについて、文献資料からその名称、建立場所、設立者等を確定し、明人の別集、地方志、書院志等に収録された「書院記」「祠廟記」等の資料を精読して分析・考察を行った。(2) また、『王文成公全書』（「年譜附録」ほか）に詳細な記録が残り、所在地が明確な書院や祠廟については、現地に赴き、建築物、扁額、楹聯、石刻、あるいは遺跡等について、実地調査を行った。その際に、現地の博物館あるいは公署に保管されている石刻や文献資料などについても調査を行った。

4. 研究成果

(1) 2015年度の研究では、明の嘉靖九年（1530）に王守仁の祭祀の中心となる施設として天真精舎が浙江省杭州に建立されて以降、嘉靖十年代には、王守仁を祭る祠廟・書院が各地に広がっていった様子を主に考察した。研究対象とした主な資料は、『王陽明全集』、『陽明後学文献叢書』、各種書院志であり、これらから王守仁を祀る書院・祠廟の記録を探し出し分析・考察を行った。なお、調査の過程で、『勲賢祠志』（内閣文庫蔵）の「勲賢祠総図」に、勲賢祠の本となった天真精舎とは別の「陽明精舎」なるものの記載を発見した。この「陽明精舎」は、勲賢祠（天真精舎）に隣接しているにもかかわらず、他の文献資料には全く記載がない。このことから、毛奇齡『王文成伝本』に言う書院・祠廟のうち、文章記録にないものについても、明清時代の古地図や地方志所収の地図の調査によって所在地を確認できる可能性があることが明らかとなった。

2016年度は、前年度の研究で得られた資料の整理と行うとともに、地方志所収の資料を対象に、王守仁を祀った書院・祠廟の記録を調査し考察を行った。その結果、例えば、『寧国府志』『涇県志』等から、水西精舎における王守仁の祭祀の変遷に関わる興味深い記述を見つけることができた。その内容を分析した成果の一部は、2016年10月末に湖南大学嶽麓書院で開かれた、「儒学的歴史演進と伝播—紀念嶽麓書院建院1040周年国際學術論壇」において、「水西書院の歴史」という題目で発表を行った。

2017年度は、前年度に引き続き地方志の分析を行うとともに、これまでの研究で得られたデータの整理作業に着手した。具体的な作業内容としては、まず、王守仁の逝去後に各地に建立された書院と祠廟のうち、嘉靖年間に建立されたもので、具体的な資料が残存している34の書院・祠廟について、名称、所在地（明代の行政区画、現在の行政区画）、設立に関与した門人・官員の一覧（字号、生卒年、出身地、師事時期、登第年ほか簡単な履歴）、残存する「書院記」「祠廟記」等（文献名、巻数、所蔵機関等）を整理した。これらについては、論文等による公開に向けて、現

在も作業を継続中である。

以下には、幾つかの個別具体的な問題を取り上げて、本研究で得られた知見を簡単に述べることにする。

嘉靖年間における王守仁の書院・祠廟祭祀を地域的に見ると、王守仁の故郷であり、かつ銭徳洪・王畿といった高弟達が在住する浙江、そして、鄒守益・欧陽徳をはじめ王守仁の高弟達が同様に多数在住していた江西が先行し、やがて、南直隸（安徽、江蘇）その他の地域に拡散していったことがわかる。

一方、書院・祠廟の建立者に着目すると、嘉靖九年（1530）に薛侃・銭徳洪・王畿等が浙江杭州に建てた天真精舎、嘉靖十三年に鄒守益が江西安福に建てた復古書院のように、王守仁の直弟子達が主体となって建てた書院・祠廟が先行した。そして、嘉靖十八年に徐階が江西提学副使に赴任した際に江西南昌に建てた仰止祠、嘉靖二十三年に徐珊が湖広辰州に赴任した際に建てた虎溪精舎、そして、嘉靖四十二年南畿提学御史の耿定向、寧国知府の羅汝芳が南直隸宣城に建てた志学書院など、王守仁直伝の高弟や再伝の弟子が、地方官として赴任した際に、在地の土人の協力を得て建立したものが続いた。さらに、嘉靖十六年に浙江監察御史の周汝員が浙江紹興に建てた新建伯祠、嘉靖三十二年に太僕少卿呂懐と巡按御史の成守節が南直隸滁州に修復した陽明祠、嘉靖三十三年に南京監察御史の閻東と寧国知府の劉起宗が南直隸涇県に建てた水西精舎、嘉靖三十五年提学御史の趙鏗が南直隸広徳州に再建した復初書院のように、王守仁に私淑する各地の土人が監察御史・提学官といった地方官に働きかけて書院の建立や祠廟の再建を実現させたことで、王守仁の祭祀は一層拡散していった。

本研究の主たる目的である王守仁の書院・祠廟祭祀の展開と陽明学の伝播との関係について最も興味深い事例の一つが、南直隸寧国府涇県（安徽省涇県）の水西精舎である。当該地域は、浙江・江西に比べ、もともと陽明学の伝播がおくれていたが、王門の高弟である王畿・銭徳洪・鄒守益・欧陽徳らが中心となって、書院・祠廟の整備を図るとともに、定期的・組織的な講学会を開催することで、徐々に陽明学の信奉者を拡大させていった地域であった。その具体的な状況をめぐる考察の一部は、「寧国府における王龍溪の講学活動—水西の会を中心に—」（『語り合う 良知 たち—王龍溪の良知心学と講学活動』2018）において明らかにした。

嘉靖年間における王守仁の書院・祠廟祭祀の活動が第一の目的としたのは、地方における陽明学の伝播・普及であったが、その最終的な目標は、王守仁を孔子廟に従祀することで、陽明学を国家公認の学問とすることであった。その活動の成果がようやく実を結び始めるのが、隆慶年間から万暦年間初頭であり、最終的に万暦十二年（1584）に従祀が実現した。これ以降、陽明学の影響力は確乎たるも

のとなり、それにともなって、王守仁を祀る書院・祠廟の設立も一層拡大していくこととなった。

各地で王守仁の書院・祠廟祭祀を推進した王守仁の門弟達が、王守仁の孔廟従祀を実現させるために行った様々な活動の実態については、「万暦元年浙江郷試の策題について—王守仁の孔廟従祀と浙江王門—」（2018、近刊予定）にまとめた。

（2）一方、現地調査については、2015年度の7月に、浙江省紹興市の陽明書院、嘉興市の文湖書院、衢州市の衢麓講舎、永康市の寿巖書院の調査を行った。これら浙江省内の書院と祠廟の調査では、石刻等の資料を直接探し出すことはできなかったが、調査の前後に行った地方志等の文献調査で、王守仁を祀った書院と祠廟に関する多くの有益な知見を獲得した。また、3月には、安徽省池州市九華山で調査を行った。嘉靖十四年に王守仁を祀る仰止祠が建立されたとされる化城寺の周辺には、その遺址は残っていなかったが、化城寺に保存されていた石刻資料の中に、万暦末年の王守仁の祭祀に関する記録を発見することができた。

また、2016年度には、明代の南直隸寧国府一帯（安徽省宣城市、涇県、広徳県）を訪れ、志学書院遺址、水西精舎遺址、涇県儒学遺址、広徳州儒学遺址ほか、王守仁とその後学に関係する史跡の調査を行った。さらに、10月末には湖南大学嶽麓書院の研究者とともに、湖南省懷化市の虎溪精舎を訪れ、現地に残存する明清期の石刻資料等を調査した。

2017年度は、7月に福建省武夷山地区における書院・精舎遺址を訪れ、王守仁とその後学に関係する史跡や石刻資料の調査を行った。さらに、2018年3月には安徽省滁州市の紫微泉陽明書院遺址、浙江省余姚市の陽明書院遺址、王守仁故居ほかを訪れ、現地に残存する明清期の石刻資料等を調査した。

現地調査によって得られた資料（建築物、扁額、楹聯、石刻、その他関連の文物の写真データ）についても、今後少しずつ公開していくための整理を進めている。

（3）上述のように、本研究を通じて、書院・祠廟における王守仁の祭祀の広がりが、陽明学の伝播にいかなる影響を与えたのかという問題について有意義な分析結果が多多得られたが、それだけにとどまらず、本研究をさらに発展させていくための具体的な構想も幾つかできあがり、現在はこのテーマの研究に着手している。

まず一つに、宋から清末に至るまでの主要な儒学者の思想の伝播と書院・祠廟祭祀との関係に関する通時的な研究である。特に、近世中国を代表する儒学者である朱熹、また、王守仁の思想の先駆とされる陸九淵についての研究は重要であると考えられる。そして、明代に孔廟従祀が認められた王守仁以外の思想家、薛瑄、胡居仁、陳献章について、同様の研究を行うことは、明代思想史の研究をよ

り深化させる上で極めて重要であると考え
る。

また、本研究を通じて気付いた問題として、
王守仁を祀った書院・祠廟には王守仁の肖像
を祭っていたという事実のもつ意味である。
王守仁を祀った書院・祠廟では、多くの場合、
春秋の時期を中心に王守仁の祭祀が行われ、
その場で講学会が開かれたが、その際に、王
守仁の肖像を掲げたという記録が多く見ら
れる。明代の嘉靖年間には礼制改革で孔子廟
から孔子の塑像が撤去され、木主に変えられ
るが、書院・祠廟における儒学者の祭祀では
むしろ肖像が重要であった。伝存する王守仁
の肖像画資料について、制作時期や伝承の経
路などについて調査を行うことで、明代にお
ける儒学者の書院・祠廟祭祀の儀礼の実態に
ついて興味深い知見が得られるのではない
かと考えている。

さらに、本研究を発展させる構想の一環と
して、2017年4～6月に湖南大学嶽麓書院か
ら受け入れた訪問研究者と共同で日本国内
の「白鹿洞書院揭示」に関する文献の調査・
研究を行い、その際、明代における白鹿洞書
院の位置づけについて考察する機会を得た。
先述の「寧国府における王龍溪の講学活動—
水西の会を中心に—」において明らかにした
ように、水西精舎では、万暦後半期には、王
守仁と朱熹がともに祀られるようになって
いた。では、当時の白鹿洞書院の祭祀におい
て、朱熹と王守仁両者の扱いはどうなって
いたのであろうか。この問題について考察す
ることは、明代の書院と思想史との関係を解明
する上で重要な意義を有すると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

鶴成 久章、万暦元年浙江郷試の策題につ
いて—王守仁の孔廟従祀と浙江王門—、東洋
古典學研究、査読有、第45集、2018、掲載
頁未定

吉田 公平、小路口 聡、早坂 俊廣、鶴成
久章、伊香賀 隆、播本 崇史、鄒守益「会語」
資料(青原の会)訳注—陽明門下の会語記録
を読む 其の二—、白山中国学、査読無し、
通巻24号、2018、1-46

〔学会発表〕(計3件)

鶴成 久章、水西精舎の歴史、儒学的歴史
演進与伝播—紀念岳麓書院建院1040周年国
際學術論壇、2016

〔図書〕(計3件)

小路口 聡編、研文出版、『語り合う 良
知 たち—王龍溪の良知心学と講学活動』、
2018、444(28-63、206-242)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鶴成 久章 (TSURUNARI, Hisaaki)
福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20294845